

『脱原発』の意義の変遷

原発推進派“Phase-out Nuclear”と反原発派“Immediate No Nuclear”の攻防

Miyauchi Institute of Social-ty 宮内紀靖

I 目的

脱原発に関する態度については①積極的推進②消極的推進③中立・不明④消極的反対⑤積極的反対の五つの思考がある。原発に関する対応はA原発推進B反原発C初期の脱原発①後期の脱原発E卒原発F廃原発の六つが存在する。それらの分析から『脱原発』の意義を明確にし、原発をどうすべきかを明らかにすることを目的とする。

II 分析の方法

政府の『脱原発』、吉岡・長谷川の『脱原発』（吉岡 p4「原子力発電事業からの段階的撤退」長谷川'96 p11「脱原子力社会とは原発全廃社会を近未来の射程に入れているが《即時廃止ではない》」）と、過半数の一般市民の理解する“Immediate No Nuclear”即時原発廃止が①~⑤のどれか、現実対応のA~Fとどう係るか文献等に当たり解析する。

III 分析の結果

Aは『原子力ムラ』社会を構成する論理であり、Bは原子力・原爆反対派の論理で有力な初期の原子力物理学者と被爆者団体の論理である。Cは反原発の初期の気弱な反対の一部学者の論理であった。Dは2011福島原発事故後の反原発派の主張と、隠れ積極推進派の表向きの論理。Eは脱原発派よりも強い反原発の党派論理であったが、一年も経たずに消滅した。Fは作家の野坂や『廃原発の会ヨコハマ』の即時原発停止の論理だ。

其々の言い分に理屈は述べられているが、原発資源は石油よりも少なく、原発電力は高く、危険を回避する事が原理上出来ず、二酸化炭素地球温暖化説は誤っている(伊藤・渡辺)し、原発燃料の完全処理は出来ないし、フェイルセーフの原則が守れぬ原発・核融合は地球上ではやってはならないものだというのが時間が経つにつれて解ってきた。

IV 結論

『脱原発』の現在の意義は、原発推進派①の完全な隠れ蓑になっている。②から④の非積極的推進派の意義も、積極推進派の隠れ蓑の旗印となって、最早市民は『脱原発』は使うべきではないことが解った。現時点の『脱原発』は原発推進派の隠れ蓑旗印だ。

文献

長谷川公一;1991;「社会紛争」なぜ原子力をめぐる合意形成は困難か ;吉田民人編『社会学の理論でとく現代のしくみ』p243-61 ;新曜社。

長谷川公一;1996;『脱原子力社会の選択』新エネルギー革命の時代 ;新曜社。

長谷川公一;2011;『脱原子力社会へ』電力をグリーン化する;新書新赤版 1328 ;岩波書店。

伊藤公紀・渡辺正;2008;『地球温暖化論のウソとワナ』;KK ベストセラーズ。

宮内紀靖;2018;「18 イタリアの原発問題」;三金会 2018/2/16 資料 ; 廃原発の会ヨコハマ。

野坂昭如;1983;『科学文明に未来はあるか』;新書黄版 223 ;岩波書店。

吉岡斉;2011;『新版原子力の社会史』その日本的展開 ;朝日新聞出版。